

小林 小じん

こばやしびと
Vol.51



自家製堆肥。原料は、落ち葉、草や米ぬかなど。枠には通気性のよいワラを使用。発酵の熱を活用し、冬には発芽用の温床苗床としても利用している



(上) 畑の中にはムギも。イネ科には土壌をリセットする効果があるという。(左) 特に力を入れているトマト。(右) タマネギの出来に、笑顔がこぼれる。(下) 配達前の野菜セット

「畑には色々な生き物がいた方がいいと思う。豊かな生態系の中でこそ、たくましく、美味しい野菜が育つんじゃないかな」。

堀研二郎さん(30)は、北西方は、市内でも珍しい「有機農家」。少量多品目の野菜を栽培し、個人に直接採れたての野菜セットを配達・販売する若手農家だ。

「畑には色々な生き物がいた方がいいと思う。豊かな生態系の中でこそ、たくましく、美味しい野菜が育つんじゃないかな」。

農家。試行錯誤の日々だが、有機で「おいしい」野菜づくりに挑んでいきたい。

堀さんは、有機農業ならではの技術を駆使し、害虫や病気への対策を取る。例えば「輪作」という手法。同じ土地で、周期的に栽培する農作物を変えることで土の栄養バランスを保ち、病気などの問題を防ぐ。

「輪作」や「混植」を巧みに取り入れているからだ。「農業には、とにかく真面目で甘えがない人」と評するのは妻の三千代さん。「主人の野菜は、エネルギーシユだとよく言われます。私もその野菜の味にほれ込んだファンの一人です」。

堀さんは、中学生のころから「地球にやさしい男になる」と公言するほど自然に興味を持って育った。小林高校卒業後、環境保全について学ぶため、東京農業大学に進学。学んだ中で、特に影響を受けたのが「農業の多面的機能」という考え方。農業が食の提供だけ

でなく、景観や水資源の保全、憩いの場など、多くの機能を持つことを知った。

卒業し、野菜の販売を行う企業に就職。1年後、農家への転身を決意し、退職。岐阜に移住し、愛知県や長野県の有機農家に弟子入りし、有機の考え方や技術をひたすらに吸収した。3年目になると「あの農地でよくここまで」と、農作物を褒められるまでになった。

「充実した3年間。技術だけでなく、遊び心を持ち、消費者とのつながりの大切さを学びました」。

平成23年、帰郷し、新規就農した。現在、畑1畝と竹林0.3ヘクタールに、年間40〜50品目を栽培。その日に採れた10〜14種類の旬の野菜をセットにして、直接個人に配達している。

「ホリケンの野菜いいね」と言ってくれる人も増えてきた。手ごたえもあるが、課題も多い。故郷の自然や人にやさしい持続可能な農業が目標。「地球にやさしい男」の歩みは止まらない。

有機農法で「おいしさ」にこだわった野菜づくりに挑んでいきたい



有機農業に取り組む若手農家

ほりけんじろう
堀研二郎さん



メールアドレス: horikenfarm@gmail.com
サイト: http://horikenfarm.web.fc2.com/